

# 新谷 ひろし（あらや・ひろし）

## 1、プロフィール

俳人。青森俳句会「暖鳥」創刊翌年から入会し作句。成田千空と共に「暖鳥」若手として活躍。吹田孤蓬亡き後、青森俳句会代表・「暖鳥」発行人となる。青森県現代俳句協会初代会長。青森の風土や己の生活を独特の感性で描く。寺山修司の俳句の調査研究でも知られる。「雪天」を創刊し主宰を務めた。

<生没>

1930(昭和5)年 12月7日 ~ 2020(令和2)年9月29日

<代表作>

『飛礫の歌』(昭和 39)以降、『大釋迦峠』『蘆生の村』『螢沢』『鏡の蝶』『美貌妻』『砥取山』『月見野』『雪天』と、句集9冊を発行。評論では『寺山修司の俳句』『「暖鳥」と寺山修司』(ともに平成 18 年)を発行。

<青森との関わり>

南津軽郡大杉村(現青森市浪岡)生まれ。弘前高校卒業。青森県庁に就職、学務課、青森県立図書館、その後県立高校教員として定年まで勤務。青森県俳句懇話会創立に尽力。青森県現代俳句協会初代会長。

## 2、作家解説

1930(昭和5)年、青森県南津軽郡大杉村(現青森市浪岡)に生まれる。昭和 22 年、歌人後藤半四郎の勧めで青森俳句会「暖鳥」に入会し作句を始める。吹田孤蓬に師事し、成田千空とともに若手実力者として活躍した。あざみ年少作家賞受賞を契機に河野南畦主宰の「あざみ」にも入会。弘前高校では山口寿のもとで句作り、昭和 24 年高校生俳句誌「かたくり」を創刊。昭和 25 年より県庁勤務、昭和 30 年より「暖鳥」編集担当となる。県内の俳人の大同団結をめざし、高松玉麗や増田手古奈の結社等に呼びかけ、村上しゅらと共に昭和 34 年青森県俳句懇話会を創立、初代事務局長として尽力する。

昭和 36 年より県立高校教員となる。青森の風土に関する研究を行いながら句作を続け、昭和 39 年句集『飛礫の歌』を刊行。昭和 49 年水原秋桜子編『現代俳句鑑賞辞典』に「雪卸し一隅の青天はためかす」など2句が採られ全国にその名が知られ、風土俳句の担い手としても注目される。この頃から寺山修司の俳句や成田千空論などの俳論を発表。後に『増補改訂版・寺山修司俳句全集』刊行に協力するなど「暖鳥」同人としての証言や緻密な調査などで寺山修司研究に大きく貢献している。

昭和 60 年青森県現代俳句協会を結成、初代会長を務めた。平成元年には青森俳句会代表・「暖鳥」発行人となる。平成3年「暖鳥」主宰となるも、平成 18 年創立 60 年を節目に解散し、新たに「雪天」を主宰。飯田龍太『名句鑑賞辞典』に「下北のものいふ木々よ雪の中」「稲妻やにんげん還る土照らす」等3句掲載。大岡信の『折々のうた(第四)』等にも句が紹介されている。平成元年青森県文芸協会賞、平成 15 年青森県文化賞、平成 18 年に青森県褒賞を受賞。県内外の多数の俳句大会の選者を務める。

句集は『飛礫の歌』『螢沢』『雪天』等9冊。句碑は西津軽郡深浦町(建立当時は岩崎村)に2基と静岡県、山形県の合計4基。その俳風はどの流派にも染まらぬもので、青森の風土と人間存在に対する独自の鋭い視線と、土俗とモダニズムの感性が混じり合う語感とが印象的である。

### 3、資料紹介

#### ○「青森県俳句年鑑」

雑誌

1959(昭和 34)年 12 月 20 日

210mm×150mm

青森県俳句懇話会の出版による青森県俳句年鑑である。青森県俳句懇話会創立総会時の写真が掲載されており、県俳壇の作品、県内結社および県俳人の名簿がまとめられた画期的な雑誌である。編集発行人は当時の東奥日報社長の工藤汀翠であるが、実質的な懇話会創立の立役者は、第5回角川俳句賞を受賞

した村上しゅらと「暖鳥」の新谷ひろしの若手俳人であった。新谷は昭和 54 年まで  
事務局長を務めた。